’18

前期日程

国語小論文（教育学部）

注意事項

1. 試験開始の合図があるまで、この問題冊子を開いてはいけません。
2. 問題冊子は一冊（四頁）、解答用紙は二枚、下書用紙は二枚です。落丁、乱丁、印刷不鮮明の箇所等があった場合には申し出てください。
3. 氏名と受験番号は解答用紙の所定の欄に記入してください。
4. 解答は指定の解答用紙に記入してください。
5. 解答用紙は持ち帰ってはいけません。
6. 問題冊子と下書用紙は持ち帰ってください。

1

次の文章を読んで、問に答えなさい（なお、出題の都合により、一部表記等を改めた）。

我が子が通う小学校で、子どもたちがポスターを見せて説明をするという授業がありました。大学生や社会人でも、プレゼンテーションをする機会などがあるでしょう。

こんなときに気になる、発表の際によく使われる論理関係を表す接続詞に「なので」があります。この「なので」が、厳しい国語の先生や年配の上司などから「正しい表現ではない」と言われると、皆、一様に驚きます。

ここで、少し、この「なので」について考えてみましょう。

「きょうは雨なので」や「きょうは雨だから」のような、「（な）ので」と「（だ）から」は、文の中で使われ別の語に続く接続助詞と呼ばれる形式です。一方、「きょうは雨だ。だから…」や「きょうは雨だ。なので…」と、いったん文が終わってから使われると接続詞となります。

接続助詞の「（雨な）ので」「（雨だ）から」は、正式な表現と認められているのですが、接続詞ではそうはいきません。接続詞の「なので」は認められていない表現として、「余計な一言」と注意されることがあるのです。実際、「なので」を間違いと位置づけている本は少なくありません。

「なので」が間違いであるという根拠は、「辞書には認められてない形式だから」という一点につきます。辞書に認められていないというのは、どういうことかと言えば、それは、その表現が新しい表現であるということです。つまり、「私が生まれた頃になかったことば（より正確には、私の言語形成期を過ぎた後に生じた表現）だから、いけない」のです。

このような問題は、要は単なる世代差です。感情的にならず論理的に考えれば、どちらも間違いであるか、どちらも正用であるかのどちらかでしかありません。

日本でもっとも収録語彙数が多く、歴史的な用例も拾っている『日本国語大辞典　第二版』で見てみますと、「だから」は、初出例として江戸時代末期の滑稽（こっけい）本を挙げています。それ以前に用例がなかったというわけではありませんが、すでに、一五〇

年以上の歴史をもつ語であることは間違いありません。一方、「なので」は、『日本国語大辞典』には用例が見られません。比較的新しく、そのため口語的な表現と言えます。

では、文法的にはどうでしょうか。

「ので」も「から」も接続助詞であることは、先にも述べました。その前についている「な」と「だ」は、いずれも断定の助動詞の、それぞれ連体形と終止形です。連体形の「な」は、その後に準体助詞に由来する「の」があるために連体形になっており、一方、「から」は単純に終止形の「だ」に続いているのです。

ただ、よく考えれば、この「な」も「だ」も、助動詞の活用形です。助動詞は、付属語といって、前に何かの自立語がある場合にのみ使われる形式です。つまり、「雨なので」や「雨だから」のように、前に自立語である「雨」のような名詞がある場合か、「元気なので」「元気だから」のように、自立語である形容動詞の活用形「元気な」「元気だ」の場合には正用と言えますが、そのいずれでもなく単独で「な」や「だ」が用いられることはありえないのです。つまり、「だから」も「なので」も文法的に同じ構造を持ち、「なので」がダメなら、「だから」もダメなのです。

そもそも、接続詞の「だから」は「そうだから」が省略された形です。今でも関西などの方言では「そうやから」類の「せやから」などが用いられますが、「やから」と始めることは基本的にありません。必ず副詞の「そう」を置かなければならないのです。同様に、「だから」も、本来「そうだから」と言わなければならない。にもかかわらず、単独で接続詞の用法をもって使われるようになっていて、「だから」単独で用いても間違いとは言われません。なぜなら、日本語の文法が整備されていった時代には、すでに「だから」ということばは、あったのですから。

もし、この「だから」を正しい表現と認めるのであれば、論理的には、「なので」も正しい表現と認めなければなりません。「だから」と「なので」の間に線を引けるとすれば、「私が使わない」という主観的な基準によるものでしかないのです。

このような時差による線引きは、言語が変化するものである以上、常にいつの世の中でも起きるものです。『枕草子』の作者清少納言は、第一八六段で次のように述べています(『枕草子　新日本古典文学大系二五』岩波書店による)。

ふと心おとりとかするものは、男も女もことばの文字いやしう遣ひたるこそ、よろづのことよりまさりてわろけれ。ただ文字一つに、あやしう、あてにもいやしうもなるは、いかなるにかあらむ。（略）

なに事をいひても、「そのことさせむとす、いはむとす、なにとせむとす」といふ「と」文字を失ひて、ただ「いわむずる、里へいでむずる」などいへば、やがていとわろし。（略）「ひてつ車に」といひし人もありき。「求む」といふことを「みとむ」なんどはみないふめり。

男も女も言葉遣いが下品だとがっかりするという中で、「いはんとす」が正しい言い方で「いはむずる」のように言うのは好ましくないと述べています。また、言い間違いの例として、「ひとつ」というところを「ひてつ」と言ったり「求む」というところを「みとむ」と言ったりしていることも挙げています。

（山田敏弘『その一言が余計です―日本語の「正しさ」を問う』二〇一三　筑摩書房七七頁―八一頁）

問　本文を一〇〇字程度で要約したうえで、傍線部「時差による線引き」について、あなた自身の意見を述べなさい。（八〇〇字以内）

2

以下のマンガをふまえて、問に答えなさい。

（毎日新聞二〇一六年九月三〇日）

問　あなたなら、（ゲームも世界を広げるが）本を読むことも世界を広げることをマンガの子どもたちにどのように理解させるか、実在の本を取り上げるなどして、できるだけ具体的に述べなさい。（四〇〇字以内）